

平成 22 年度山梨大学附属図書館医学分館地域貢献事業
生と死のコーナー関連行事

講演会 日本社会といのち

講師 林 義子 氏

場所 山梨大学医学部キャンパス 臨床講義棟小講義室
日時 平成 22 年 10 月 21 日 (木) 18 : 30 ~ 20 : 00
主催 山梨大学附属図書館医学分館

「生と死のコーナー」からお話をしてくださいと依頼され、今までの講義録を全部見せていただきました。今までの先生方は、生にしても死にしても現場で実際に働いていらっしゃる方がたで、生そのものとか死そのものについてお話になっていると感じました。もちろんそれも非常に大切ですが、私が今一番感じているのは命がすごく軽くなっているということです。私自身、非常にそのことを嘆いている一人で、どうしたらそれを変えることができるかを考えさせられています。その中で私がわかってきたことは、生にしても死にしても非常に個人の問題でもあると思うのです。自分が生きるということはどういうことなのかとか、死ぬとはどういうことなのか。それからまた、実際に関わった時、目の前で亡くなっていく人たちそのもののいろいろな状況などを考えると、個人的な作業を要求される話題だと思います。

しかしそれ以外に、私は日本の社会が沢山の人たちの命にかなりの影響を与えてしまっている事実を強く感じています。殊に若い人たちは、はっきり言えば非常に社会に振り回されている。そしてその結果として、以前よりも命を軽く見てしまうように思うのです。

今日は、そういう意味で、日本の社会に生きている私たちが、命や死について考えるとき、社会からどのような影響を受けているかを考えてみる必要があるのではないかと思います。それについて私の体験をお話しながら、みなさまと一緒に考える機会にさせていただいたら幸いに思います。

私が生と死に関心を持ち始めた入り口は、「いのちの電話」という組織です。ここで感じたこと、状況をまずお話しするところから始めます。そしてその後で、日本社会が何か大切なものを忘れてきているのではないか、その大切なものというのが一体何だったのか、

その忘れていたものが何なのかというようなことも触れることが出来ればと思います。最終的には、今、私たちは生きていて、嘆かわしいと思っている私として、何が一体出来るのか、どういう風にしていったらいいのか、その辺について少しでも探ることが出来ればと思いますし、そういうことで皆さん自身も何か考えるきっかけになってくださったらありがたいと思います。

今、命ということをよく言われています。命の問題は、前よりずっと頻繁に言われていると思います。普段は病気とか災害などによって、命が危機に晒されている時に初めて考えるのではないのでしょうか。毎日酸素を吸って生きていますが、それについて意識しません。自分が今、酸素を吸っているとか、生かされているとか、そういうことはあまり考えません。けれども現在、命の問題がある意味では問題視されています。この状況は本当に以前と違い、極端な言い方をすれば、日本の社会で命が危機に晒されていると言えるでしょう。

山梨にいと、スペースがあって生活がゆったりとしていることを感じます。でも、今私は東京にいますが、東京の人たちが感じている危機感は少し異常かなと思います。電車に乗る時、以前はホームで平気で黄色い線より先に立っている人が沢山いました。しかし最近、かなり後ろにさがって待っている人が増えています。何ヶ月か前に連続して、ホームから突き落とされて、怪我をしたり亡くなったりしました。そのような事件が割合頻繁に起こっています。

それから、子どもたちへの誘拐・虐待などが多く、そのような事件が毎日と言っていいほど起きています。また学校の状況も、昔は中学校での荒れた教室が多かったのですが、

今は小学校でも起こり、いじめも多発しています。さらに、先生方の登校拒否が多かったり、校長先生が自殺したりとか、そういうような状況があります。このことは当然、殊に教育界だとか政府の方たちなども取り上げて考えておられますが、私はそれではもう間に合わないのではないか、日本で普通に生きている私たちが真剣に考えなければならない問題があるのではないかと思います。ですから、年をとった私の世代が、「昔はもうちょっとゆったりしてたよね。」とか「人を大切にしてたよね。」と言っていることを、少しでも今の状況の中に取り戻すためにはどうしたらよいかを考える必要があるでしょう。偉い方たちがやることはまた別に、庶民である私たちが生活の中で大切にしなければならないことが沢山あるような気がしているのです。そういうことを一緒にこの機会に考えてみたいと思いました。

先程申し上げたように、私が生と死の問題に関心を持つようになったのは、「いのちの電話」に関わってからです。「いのちの電話」は1970年に設立されました。1970年から私は20年間スタッフとして事務局で働きました。その間に感じたことで、さっき申し上げたように、社会が私たち一人ひとりに与える、命に関わるような影響がかなり強いなということを経験しました。

どうしてそのような変化が歴史のなかで起きたかを考えてみたいと思います。

1945年に第2次世界大戦が終わった時、日本の国は全てを失いました。焦土と化したことは甲府も同じでした。ほとんどが焼け落ちました。「戦争に負けた」というショックは、私たちにとって非常に大きかったのです。私はまだ子どもでしたが、そのころに18~20才くらいの年代の人たちにとっては、本当に勝つと思っていた戦争に負けたという逆の現実を前にして、すごいショックだったと思います。これは今の若い人達、60年代70年代以降に生まれた方たちは経験することが出来なかった特殊な経験です。

しかし、私たちは「戦争に負けた」ということが、挫折感にはあまりならなかった部分

もあります。むしろ、「戦争が終わってよかった。」、そして、「今から本当に平和な生活ができる。」という喜びも大きかったのです。しかし、一番大きな犠牲は、何十万か何百万か正確な数はわかりませんが、命が奪われたということです。そしてそれは、本当に理不尽な奪われ方ですよ。若いお父さんとか、もっと若い、やっと一人前になったばかりの若者たちが戦争で命を落としました。それは、その戦争の中では「お国のため」というすごい使命感があったでしょうけども、負けてみれば、一体あれは何だったのか。その虚無感だとか敗北感、矛盾などの意識が非常に強かったと思います。その時に、「無駄な命は無いはず。」、そして「どんなに貧しくても私たちは命を大切にしよう。」というのが、その時の日本全体の国民的な価値観になっていたと思います。

何も無い、全てを失った日本社会を復興させるために、日本の政府は経済復興を目指しました。その他のこと、殊に軍備はアメリカに委ねて、経済復興を国の政策として全力投球をしました。そのおかげで、日本は諸外国がびっくりするほどのスピードで経済復興を成し遂げました。私も、1970年度ぐらいが大学生または就職している頃だったのですが、日本の復興のためのエネルギーというのは、本当に凄い勢いでした。きっと日本はまた元に戻ることが出来るだろうという確信を多くの日本人は持ったでしょう。そしてそれは、後で考えてみれば、戦争の時に全ての日本人が、「挙国一致」という国を挙げて戦争のために、命だけではなくて物も全部供出し、提供したのです。金とか、自分の持っている財産の多くを。それほどの一致した力で戦争に勝つため、国のために働き、戦ったのですが、そのエネルギーと同じエネルギーを終戦後は経済復興にあてたのです。この目覚しい復興は、他の国にとっては脅威に近かったと思います。今は中国や韓国もそのような感じが無くはないですね。1950年ごろの経済復興の勢いは目覚しいものがありました。その当時は池田勇人さんという人が大蔵大臣として、所得倍増論というのを出しました。10年間で日本の全ての国民の生活水準を先進国と同じように、その当時の所得の倍を目指して計画し

たのですが、なんと 7 年で達成されました。このスピードとか勢いは目覚ましいものだと思います。

そういう日本全体の状況の中で、終戦から 20 年くらい経った 1970 年、東京にいるキリスト者、クリスチャンの人たちが集まって「いのちの電話」をやろうということになりました。この「いのちの電話」というのは、その時に、社会のあの勢いに追いついていけない、そのスピードに追いついていけない人や、社会の陰に隠れてしまっている人たちの声を、ボランティアの人たちが対等な立場で聞いて、働けない苦しみだとか、職にありつけないことだとか、家族に対するいろいろな思いだとかを聴きましょうということで、24 時間の電話相談が始まったわけです。

私は創立期からそこで働きましたが、電話は 1970 年の 10 月 1 日の夜中の 12 時から 24 時間ずっと続けられました。この活動は全部ボランティアによって行われました。普通の人たちが行っているのです。その中には学校の先生だとか、お医者さんもいるし、看護師さんもいるし、いろいろな職業の人がいますが、一人のボランティア、一人の人間として、自分の資格とか身分等から自由になって、ただ「いのちの電話」のボランティアとして電話に出て、話を聴く活動でした。幸い、最初の時から東京は 24 時間で 5 台の電話をフルに稼働させていますが、2010 年 10 月 21 日の今日まで、この電話は切れたことはありません。ずっと続いています。そして今は東京だけではなくて、全国にこの「いのちの電話」が来ていますし、山梨にもあります。

この電話に私が関わってみて、そこでかかってくる電話の内容というのは、社会を映している鏡と言えるでしょう。1970 年代は、終戦のときのあの「命を大切にしよう」と言っていた時代からすでに 20 年を経過していますが、すでに一人一人の命を大切にしないよう

な状況が生まれ始めていました。一番顕著にその現象が表れたのは、青少年や病人、お年寄りに対してでした。あの頃は労働力が必要だったので、遠い地方から、中卒の子どもたちが、「金の卵」と呼ばれて、みな東京や大阪などの大都市に送られてきて、さまざまな生産に駆り出されました。その子達は、東京方面でしたら上野駅に着いて、それぞれ色々な工場に散らばっていきました。みな社員寮のようなところで生活しながら、生産に励んだのです。中学を卒業したばかりの14～16歳です。全然生活環境の違う東京に来て、言葉も違います。特に東京のあの交通のスピードについていけない。そういう青少年が孤独と労働の辛さを訴える電話がかかりました。電話だったらどこからでも、自分の名前を言わなくてもいろいろと聴いてくれる。今でも思い出しますが、一人の女の子からかかってきた時に、彼女はすごく泣いていました。どんな状況か聞いたところ、下宿の押入れの中に入って布団をかぶって、そこに電話機を入れて話していたようです。重症なうつ状態でした。あの東京というエネルギーのシンボルみたいな社会の中で、沢山の若い人たちがそういう状況で生活していたのです。

また、小さい子どもたちからの可愛い電話も沢山ありました。午後4時くらいになるとかかってくるのですが、そのほとんどは「鍵っ子ちゃん」と呼ばれていた子どもたちです。その頃、東京では新しい団地が沢山造られ、お母さんも働きに出ていました。帰ってきた子どもたちは自分で鍵をあけて家に入ると、お母さんからの伝言、「〇〇ちゃん、お帰りなさい。おやつは冷蔵庫に入ってます。それを食べて塾に行きなさい。」といったような手紙を自分で読んで、自分で冷蔵庫を開けておやつを出し、一人で勉強する。そのような状況でした。

それから、おばあちゃんたち、高齢者からの電話もありました。「若い人たちはそうやって元気に働くけれども、自分たちはもう働けない。一日中誰とも声を交わすことが無かった。」と言って泣いているおばあちゃんの話を知りました。

日本の社会の中で生活しているいのちの何人かが、見えないところであの時代の大きな、

そして早い変化に追いついていけないために、一人ぼっちになっていたのでしょう。それは繁栄の裏返し、社会の裏です。それはどの時代でもあることかもしれないのですが、やはりあの繁栄の速度の凄さの裏に出てきたマイナスの面だったのです。私たちはそれを電話で受けていました。

私はそこで20年、ボランティアの人たちの養成にも関わりながら電話を聴くこともありましたが、かかってくる電話を見て一番気になったのは、子どもたちの状況でした。子どもたちというのは、社会の色々な反応を一番早く表しますし、繁栄の陰になる犠牲者でもあります。

最初の頃かけてきた子どもたちの訴えの中で、今でも続いているのが「いじめ」です。その頃は「シカト」と言われていました。語源は花札からきているそうです。鹿の絵の札を持っていると順番を一つ飛ばされるのです。自分の番が来てもカードを出せない、飛ばされる。これは「無視」ですね。その人の存在が無視されるのです。これがシカトです。このシカトだけは本当にやめて欲しいですね。しかし、今はいじめはもっともっと複雑になって、若い人たちの心に深い傷を残しています。一人の人間を、いてもいないように無視する。昔、私たちも子どもの頃に授業中に「学校が終わったらどこかに行こうね。」というような手紙を回しました。それがグループに回りますよね。ですが、誰かには回らない。回らない子は、自分がいるのに無視されたと思うでしょう。その時のシカトされた子どもたちの話をいろいろ聴くと、どれほど深い傷となって残っていることかを感じました。

大学で働いている先生たちも、できるだけ学生たちの話を聴くようにしていらっしゃると思いますが、「若い人たちの多くは本当に心に傷を持っていますよ。」としばしば言われます。心に傷があると言っても、昔も心に傷はあったかもしれないのですが、そのようなことを口にするのはあまり無かったと思います。しかし、今の若い人たちが受けている心の傷というのは本当に深いのです。家族の関係の中での傷も多いでしょうが、特に今は

いろいろな人間関係の中でのいじめの問題は大きく、若い人たちが生きていることを喜べない、生きていなくてもいいんじゃないかとか、自分は今もう要らないのではないかとか、こんなだったら早く死んだ方がいいと思うことが頻繁に起こっている事実があります。今、自殺が非常に多いのですが、それは彼らの心の傷と直接繋がっていると考えられます。

1970年代にこの「シカト」という言葉が流行りました。このようなことが流行になって広がる現象は、日本社会の特徴ではないかと思います。ひたひたと、子どもたちの社会の中に浸透していくのです。その結果として、「いのちの電話」にこのような内容の電話がしばしばかかってきていました。かかってきた電話を私たちは整理をしますが、そこに一連の変化と動きを見ることができます。子どもたちのシカトから始まって、現象が次から次へと違った現象を起こしていくことを捉えることができます。まずシカトが登校拒否になっていきます。今、不登校という言葉になっていますけれども、これも社会状況をよく表しているなと思います。あの時は「登校拒否」で「不登校」とは違います。学校に行きたいけれどもお腹が痛くなるとか、学校の門に入れないなどの拒否反応が出てくるのです。「不登校」はその後の現象で、学校に行かないことが前提になっていますし、以前より普通名詞になっている感じがします。

その登校拒否が家庭内暴力へと繋がっていきます。子どもたちが家で暴れ、金属バットでおばあちゃんが殺されたり、妹にめちゃめちゃ暴力を振るうというような事件が起こり、報道されるようになりました。家庭内暴力から校内暴力へと移行していく例もあります。学校で、先生たちに対する暴力。そして学級崩壊。「シカト」から始まった青少年の問題行動はこのように一連の流れとなって変化し、重症化してきているのです。70年代から80年代くらいまで、子どもたちの社会の厳しさ、これはもちろん受験の厳しさもあったでしょうし、競争社会ということもあったでしょうけれども、そういう中で子どもたちが本当に健康な人間関係を持てなくなってきました。そしてそれが、何かむしゃくしゃするとか、誰かに関わりたいけれども、関わり方が非常に攻撃的な関わり方になってしまう。そ

ういう現象として現れていきます。

70年代の初め頃は、私立の先生に「こういうことはありませんか？」というと、「ありません。うちの学校は大丈夫です。」って言っていらっしやいました。でも実際はすでに、このような傾向がだんだんと大きくなっていったのではないかと思います。そういう子どもたちの状況、学校へ行っている子どもたち、学校へ行かなくなった子どもたち、殊にもっとも不健康な流れとしては、ひきこもって学校にも行かない、両親とも話をしない、自分の部屋に閉じこもっているという状況が増加してきています。その現象が大きな事件として起きたのが、1988年だと思いますが、東京の郊外で起きた若い人による幼児の連続殺人事件です。彼も引きこもってアダルトビデオばかり見ているうちに、すっかり架空の世界に入っていったのでしょう。その環境のなかで、小さな幼児たちを虐殺しました。この事件は、その後の日本社会に不気味さと重く暗い影を落としたと言えるでしょう。

その後しばらくして、私は自分が属している修道会から本部のパリで働くようにという役目のために、「いのちの電話」を退職しなければならなくなりました。1991年にパリに行きましたが、そこでは新しい環境に適応しなければなりませんし、外国語にも慣れなければなりません。しかし同時に私は、やはりいつもいつも自分の顔を日本に向けて生活していたことを今思い出します。

ちょうど1991年のフランスの状況は、今の日本のように経済的に停滞していました。政府もフランス社会も悩んでいました。フランス人は一般に気位が高く、ほいほいと物ごとを変えない人たちです。とても古いことを好みます。町を都市計画でさっさと変えるということは余程の事が無い限りあり得ないことです。フランスにいらした方はすぐにわかると思いますが、パリの街は19世紀初めに全部小さい家を奇麗に建て替えて、今の素晴らし

いパリの街を作りました。そのような大胆な変化もありますが、一旦変えたら後はあまり変えませんが、変化のためには長い時間が必要です。現在、建物を電化したり、インターネットを入れたりしなければならないのですが、内部を替えても外側変えることはしません。ですから、何年も町の風景が変わりません。東京の風景は常に変わっています。それに比べると、パリの街というのは本当に変わらない。何年か経って行っても、全然前と変わらないです。だからどこを曲がったとか覚えていても、そのままあってくれるから、迷わないで行けます。そういう意味では現在フランス人は悩んでいるようです。世界があまりにも早く変わるので、フランスもそれに追随していかないといけないのではないかと、この間大変有名なフランスの経済学者が大統領に答申していました。

先ほど申し上げたように、フランスは 1991 年の頃は経済が低迷しました。反対にアメリカ、日本、ドイツは同じ時期に経済復興を果たしていました。それに追いついていかなかったために、国の経済が行き詰っていました。そのような状況のなかに、日本人の私が飛び込んだので、日本についての冷たい眼差しを感じていました。また、ルモンドという新聞に、毎日といっていいほど日本についての批判的な記事が載っていました。「日本は何故そんなに復興のために働くのか。家庭のことや自分のために時間を犠牲にしているのではないか?」、などなど。同時に、あの頃日本人の海外への旅行が多かったので、パリの真ん中に行くと日本人の団体さんがしょっちゅう歩いているのです。団体で歩くというのも、フランス人にとっては不思議なのです。個人で歩けばいいのに、なぜ 10 人も 20 人も一緒に歩いているのだろうか。これは批判されても仕方が無いのですけれども、エルメスのスカーフを日本の女子大生が 5 枚くらい買うのです。お金が無いはずの女子大生がわざわざ日本からパリに来て、何で高いスカーフを何枚も買えるのか。店員さんが、自分の給料の何分の一かの値段に相当するスカーフを沢山買って行く日本人を冷たい目で見ていたようです。そういう意味では、日本の復興に対して、今私たちが中国の復興に対して、韓国

の復興に対して、大丈夫だろうか、どこかで問題が起きているのではないかという見方を
するのと同じような目で見られていました。そのような状況の中で、わたくしは日本のこ
とを心配していました。

2002年の暮れに帰国しましたが、その頃は日本もバブルが崩壊して、山一証券の倒産だ
とか、オウム事件など、日本の社会が難しい問題に直面している時でもありました。わ
たくしにとっては、子どもたちの状況はどうなっているのかが心配の種でしたが、本当に
ショックな状況でした。その状況は以前よりさらに悪くなっていました。人のいのち、一
人一人の存在を揺るがすような問題を前にして、教育界や政府も考えざるを得ない状況だ
ったと思います。その結果として、ゆとり教育を取り入れた時です。

私は今でもこの事件だけは決して忘れません。2004年くらいでしたか、沖縄で中学生の
5人くらいのグループが墓地で仲間の一人にお金をせびり、断ったという理由で暴力を振る
ったのです。踏んだり蹴ったりしたそのグループの中には、女の子も二人ほど入っていま
した。NHKのかなり詳しい報道で見たのですが、いじめのリーダー格がいて、途中で「ち
ょっと休憩しよう。」と言ってストップ。一人は携帯で今の状況を誰かに話したり、リーダ
ーが缶ジュースを買ってきて、メンバーだけではなく、いじめている子にも渡しています。
そして休憩が終わって再開。結局その子はそこで死んでしまいました。子どもたちは、ど
こからかむしろを探してきて、遺体を墓地の端っこのところに放置。その後で、彼らはゲ
ームセンターに行っているのです。こういうことは本当に考えられない。そして、これに
似たり寄ったりの事件がその後もいくつか起きています。

高校生がホームレスの人たちを襲撃して、怪我をさせたり殺したりしたことがありまし
た。彼らはホームレスの人たちを襲撃し、頭をサッカーボールのように蹴ったそうです。

命がサッカーボールになってしまうのです。

こういうことを考えるだけでぞっとすることですが、しかしそれを聴いている私たち、「あ、またか」というような感じで通り過ぎているのではないのでしょうか？ 若い子ども達は、そういうことをしてもいいとは思わないでしょうけれど、知らず知らずに人の命に対する重みを意識することなく、非常に軽いものとして考えられていく傾向を生み出していくような恐ろしさを感じます。軽いどころか、命が物になってしまう。本当に人を大切ににする、そして命というのは一回限り、誰にも変えられないものという意識が失われていくのです。私は他の人になることはできない。それは神様からいただいた、たった一つの命なのです。そして、命はそこで命として生きて、生を全うする、これが目的なのです。そういう意味で、他の人に理由も無く殺されたり、傷つけられたりしてはいけないのです。でもそれをあまり意識せずにはいます。子どもたちは自分たちがやっていることをどこまで意識して、どこまで真剣に考えているかわからない。それを引き止める意志力とか知恵とか、まだ子どもたちに無いのかもしれませんが。でもこれは大人の責任です。私たちはこのような状況、社会現象の中であって、決して命の重さを忘れてはいけないのです。

中越地震の時、優太君という子が、お母さんと実家に車で行って家に帰る途中、中越地震にあって土砂に埋まってしまいました。お母さんと妹さんは亡くなりましたが、優太君は洞窟のようなところに入っていて助かりました。それを救急隊の人がみんなで助け出した、その作業をテレビで放映したのを見たことはありませんか？あれは凄く感動的な出来事で、優太君が助け出される瞬間に、私は日本中の眼がそこに行っていたと思いますし、大きな拍手が起こりました。優太君は本当に小さな一人の男の子です。その男の子の命を守って欲しいと国民が一致して思った。こういう出来事というのは、やはり私たちの心の中にまだ沢山あるのです。

でも一方で、ホームレスのおじさんの頭をサッカーボールのように扱うとか、自分の家に火をつけて、お母さんも妹も殺してしまうとか、そういうこともあります。それは異常なことです、私たちはこれを今は「異常」という言葉で片付けることはできません。

私はしばらくの間、幼稚園から短大まである学校の父兄の方々と月に一度会ってお話をしていた時がありました。そこに来るお母さんたちが、子どもが誘拐されたりとか、中学生が渋谷に出てきて男の人に捕まってアパートに閉じ込められたりだとか、そういう話を聞いた時に、今までは「ああ、自分の子でなくて良かったな。」と思っていたのが、今はそういう話を聞いた時に、「あら、うちの子は入っていないかしら。」と思うそうです。他人事ではないのです。

先程、電車のホームで私たちが知らず知らずに後ろに行つて突き落とされないようにしているという話をしました。これも私たちにとって他人事ではなくなっているということです。他人事でなくなるぐらいのことならいいのですが、こういう話を沢山聞いても、いつか忘れてしまうのです。そしてまた自分の生活に入ってしまう。その中で、命が知らず知らずに軽くなり、「命は地球より重いもの」ということにはならない社会現象が起きています。社会がそういう状況を作り出している。だとすれば、私たちはやはり社会のありようをもっと変えていかなければならない。これは、ある意味では、「豊か過ぎる日本」だからかもしれません。安全で豊かな生活のなかで危機感が無いのです。

私は海外から帰ってきて 8 年ほどになりますが、こんなに奇麗で、こんなに便利で、こんなに正確な社会はめったに無いと思いました。日本の清潔さとか安全性は外国人も驚きます。この間パリに何人かを案内しましたが、地下鉄に乗っている時に連れていた女性の方をはっと見たら、ジプシーの人たちが団体で彼女のバッグを攫っていったことがありました。幸いにお金は取られなくて、薬を入れていた袋だったのでよかったのですが、口を

酸っぱくして「気をつけて歩いてください。」と言って、旅行に行ってもみんな緊張して歩くのです。このような光景は今のところ日本にはありません。少くく事故はあるかもしれないが、あのような万引きが問題になることはありません。日本は大変豊かな国です。自然災害はいっぱいありますが、全体としては平穏な生活を送ることができます。それは、戦後の経済復興のおかげとも言えるかもしれません。

この間、日本がどれほど便利かということについて若いフランス人の男性が書いた小さい記事が載っていて、なるほどなと思って読みました。

「僕は東京に住んでいて、最近、久しぶりに自分の町のパリに戻った。日曜日に彼女と一緒に散歩がてら町に出てお店でもプラプラしようかなと思ったら、お店が全部閉まっていた。凄くショックだった。日本だったら、日曜日に閉まっているお店なんてほとんど無い。あれはとてもいい。僕たちみたいにお金が無い人間にとっては、日曜日ぐらいにしか買い物ができないし、そういうときに買わなくても、彼女とショッピングするだけで私はとてもリラックスできる。それなのに、パリの街は全部閉まっている。」

今はパリでもそうではないところがあり、日曜日でも開いているところもありますが、休みは休みとしてきちんと閉まっています。「フランスもああいう日本を真似したらいいと思う。やっごらん。きっと日曜日も開けるようになるよ。一番いいことは、日曜日でも宅配を出せるんだよ。」フランスには宅配の制度はありません。「宅配を日曜日でも送れるし、日曜日でも届けてくれる。しかも、宅配を持ってくる人がニコニコしてとても気持ちがいい。本当に日本はそういう意味では住みやすい。フランスも少し変わった方がいい。」という内容の記事でした。

この記事に対して、その後反論が沢山出てきました。当然ですね。ある人は、「日曜日は特別な日なんだ。これは家族のための日でもあるし、自分たちのスポーツの日でもあるし、友達とゆっくり関わる時間でもある。それを働くなんて、雇い主は儲かるからいいかもし

れないけど、それをお金の無い人たちに強いるとしたら、それはもっての外だ。」とか、反論が次々と出てきました。これはフランス人らしい考え方です。「働くことと休むことのメリハリ」みたいなものが日本にはあまり無いように思います。最近少し休暇が多くなりましたけど、昔、終戦後の経済復興の頃は戦争の時と同じように、「月、月、火、水、木、金、金」で、土曜日と日曜日が無い。そういう真面目さと言えるものが、日本の社会の中に沢山あるように思います。しかしそのためにゆとりが無くなり、人と人が関わるのが少なくなります。

今申し上げたように命が軽くなってしまった日本の社会のことを考えると、命について本当に大切なことを、宗教的な意味でも哲学的な意味でも、また医学的な意味でも、考える必要があるでしょう。そのために、社会がもう少しきちんとその点について押さえられるような政策を取る必要もあるでしょう。

今の日本の社会を見れば、最近では犯罪でも、子どもたちの校内暴力の問題とか、子どもがホームレスの人を襲ったりなど、いろいろとありますが、状況は以前よりさらにひどくなってきています。その一つが無差別殺人です。2008年、秋葉原で無差別殺人がありました。これは東京に住む人にとっては、差し迫ったこととして感じられます。いつ自分が殺されるかわからない。日曜日に家族と一緒に秋葉原に電化製品を見に行ったために、事件に巻き込まれたのです。その犯人を見ると、やはり深い問題があります。彼は派遣社員として生きる希望が無かった。派遣社員の人の話を聞いてみますと、大変な状況です。今もう大分良くなったかもしれないですが、富士山の裾野のあたりは派遣社員の寮が沢山あるのだそうです。そこには毎朝バスが来て、派遣社員を乗せて工場に行きます。工場に行く一日中流れ作業をやって、誰とも他の人と話さず、休憩時間もごく短く、そして夕方バスで帰ってくる。寮に入る。お金も無いし、富士山の裾野ではコーヒーを飲みに行くわけにも、デパートに行くわけにもいかないような遠いところなんです。そういうところに夜帰っ

てきて、食事をして、一人で携帯を見る。それしかない。そのような中で、彼は派遣社員になるまでに、色々なところに行きながら、自分のやる事が無い、自分を使ってくれるところがないという無力感、何で生まれてきたのかわからないような虚しい状況でした。

また、彼にとっては、母親との問題がとても大きかったようです。そういうことを聞いていると、その子に責任は無いと思います。そういう意味では、彼の場合、家族の愛情の問題がとても大きいと思います。本当に愛情を感じて、自分が生まれてきたことはよいことであり、本当に大切なこと。親も喜んでいる。そして、幸せになることをお前のために祈っているよ、というメッセージをもらったことが無かったのではないのでしょうか。だとすれば、やはり社会の中での難しい状況を一人では生きられないと思います。

派遣法は本当に企業優先の法律だと言えるでしょう。働く人のことを何も考えていない。この派遣法は世界的なものです。今も世界の企業家たちが、リーマンショックの時からぶつかっている問題でもあるのです。「物欲は善だ」という考えが、いわゆる自由貿易市場の、市場経済の真ん中にあります。それは全て利益、物を生産するという事に力を使う。そこで働けない人、働かない人、失業者、そういう人は、「自分たちで探せばいいでしょう。」という考えで、全然救済される術が無いのです。昨日わたくしは、元NHKのニュースキャスターであった磯村さんから、世界経済についての話を聴きました。その中で彼は、今の経済政策のやり方が直面している問題として、いつの間にか本当に企業優先になってしまった世界、そして日本でも同じ状況になっているということを話していました。

これについては、私には忘れられないもう一つの事件があります。それは、2005年に尼崎で起きた列車の横転事故です。運転手として働いていた若者は、大変過酷な状況と条件で働いていました。私もよくあの辺りを電車で通るのですが、尼崎から大阪にかけて同じところを3社が電車を走らせています。ですから、当然客の取り合いになります。1秒でも早く走らせればそれだけ人を運べるということで、ものすごく重い労働を運転手に課することになってしまいます。その結果として起きた事故です。その責任は運転手にあるので

はなく、企業にあると思います。亡くなった方たちの家族がどれほど苦しんでいるか。このような出来事を見ると、わたくしたちが、命を命とっていない社会の中にいることを認めなければなりません。

このような状況、現状を前にして、私たちは何をしたらよいのでしょうか？社会として、またその社会の一員として何をしたらよいのでしょうか？私が一番感じるのは、人と人との関わりがあまりに希薄になっていることです。私たちは人と出会わないような生活をしているということです。命というのは、生きているものです。生きているから当然、煩わしいことは沢山あります。「関わりを大切にしてください。」と言うと、「いやあ、あんまり人と関わると疲れるよね。」と言う人がいます。私たちの友人の一人にホームレスのおじさんがいます。最近は何年をとって病気がちなので、「そろそろシェルターみたいなところに行つたほうがいいよ。」と他の人もすすめましたし、私もそう言いました。そうしたら、「俺は行かない。」って言うのです。「どうして行かないの？」と聞くと、「人間関係が難しいから。」と言いました。「そりゃそうだよね。」とついつい共感して言ってしまいました。確かに、人間関係はそれほど易しくは無いのですが、それでも、私たちは一人では生きていないはずで、必ず誰かと生きている。誰かと生きることによって、お互いに命から出るエネルギーや、自分と異なる命の豊かさや新鮮さを感じることが出来るはずで、誰もいなかったら、一人だけだったら、自分の命としてのエネルギーもでないし、新鮮さも感じる事ができません。宇宙ステーションに飛んだ方が言っていました、宇宙ステーションから見た地球は「本当に命が満ち溢れていた」と表現していました。生き生きとしていた。地球がうごめいている。これは命によるものです。その命を大切にするためには、私たちがお互いの命を豊かにする関わりを持つこと。それを毎日の生活の中で実践していくこと、これしか無いだろうと私は思います。

私も色々な国に行ってみました、殊に日本は国土も狭いです。スペースが少ない。このキャンパスの広さは素晴らしいです。東京でいつも感じるのはスペースの少ないことです。コーヒーショップに入ると必ずすぐ隣の人のテーブルがくっついていて、普通はコーヒーショップというと、もっとスペースを置いてゆったりと座って、ゆっくり話が出る空間が必要です。しかし、東京ではそれは出来ません。場所が無い。場所が高いのです。このように日本は非常にスペースが少なく、そして人口が多い。ですが、そういうことはもう前提として考えなければならないことです。そういう現実を認めた上で、ゆとりを作るとか、人と関わることを大切にすることが必要になります。日曜日でも宅配をしてくれる日本に対して反対していたフランス人が言っていたことはやはり理に叶ったことだと思います。人間が生きていくためには必要なことだと思います。少なくとも週に2日くらいは家族と関わる。あるいは、誰かと一緒にスポーツをする。それから、友達と一緒にゆっくり話す。こういうことを大切にしていけない限り、この命の状況はまだだもって悪くなってしまうのではないかと思います。

私はこういうことを皆さんにお話したのを後で考えてみても、非常に消極的な話ばかりでしたが、昨日の講演で、磯村さんも本当に日本は素晴らしい国だとおっしゃっていました。日本に来ている外国人も日本の素晴らしさをよく知っている人たちが増えてきているとおっしゃっています。もし、今どこに住みたいかと問われたら日本に住みたいという外国人も沢山いるそうです。ある有名な経済学者は、日本に対して、地球上で消えてほしくない国の一つですという評価さえしたそうです。私は、それは本当にそうだと思います。色々問題も起きていますが、こんなに安全で、平和、そして豊かな文化や伝統に富み、人に対する思いやりも深いものがあります。でも今、その思いやりが失われたり、うまく通じなくなったりしてきています。これは生活にゆとりが無く、自分の仕事だけというような感じになり、自分が社会を成り立たせている一人なのだという意識をあまり育てていな

いことも原因だと思います。電車に乗るとみんな携帯を触っています。ある日曜日に電車に乗ったところ、正面に中学生がスポーツバッグを持って乗ってきました。多分試合があって、試合から帰ってきたのでしょうね。そんな時こそ、試合がどうだったか話す時だと思うのですが、3人が3人とも携帯を見ているのです。これでは自分の世界だけです。他の人との直接のコミュニケーションが無い。関わりがだんだん薄れてきています。ですから自分の命も豊かにならない。刺激を受けない。また、他の人の命も命として感じられなくなっていきます。

やはり命というのは素晴らしいものです。赤ちゃんを見ると、すごく感動します。手がこんなに可愛いとか、もうちゃんと人を見るようになったとか、一つずつ感動します。私たちみんな赤ちゃんの時には、その感動の主だったのです。そういうところのものを、もう少し取り戻すためには、やはりゆとりを持つということが必要だと思います。スペースが無いとか、行くところが無いとか、それはあるかもしれないですけども、でもやはりこの社会を成り立たせることや、自分がこの社会に属しているのを意識するのと同じように、他の人との関わりを意識することが大切です。

そういう意味では私は、「男はつらいよ」の世界が好きなのです。あれは本当に関わりの中の一つの生活共同体です。寅さんの世界。妹とか、叔父さんとか。お寺のお坊さんとか小僧さんとか。全部やはり地域社会とその家族で寅さんという人を描いています。山田洋次さんはそういう意味では関わりを描きたい人だと思います。あの方の作品は全てそうです。今度の、私はまだ見ていないのですが、大分前に封切された吉永小百合が出ている「おとうと」という映画ですが、それも彼の一番大切なメッセージを映画の中に入れていないかと思います。

私は東京のことを中心にいろいろとお話しましたがけれども、この生と死のコーナーを持っている大学は本当に大切だなと思います。そしてそういうコーナーで、私たちが本当に命を命として生きて、そして私は死というのは、私は死んだことが無いから何も言えないと実は思っているのですが、私たちが死に至ることは確かです。やはり、命を完全に私たちが生きる、そのために私たちは共に関わりを生きている、それを一人ずつが目指すこと。キリスト教的に言えば、神様も私たちが「生きること」、生きるために創造しているわけですから、どのような困難に遭遇しても「生きよ。」と言っています。生きるということを大切にしていって、そんな社会をみんなで少しでも実現できるように。微々たる力ですけど関わり合う、そのような社会が来るように願っています。

【講師紹介】

『いのちの電話』創設メンバー。

甲府市出身 カトリック援助修道会 会員

山梨県立第一高等学校卒業

中央大学法学部法律学科卒業

上智大学文学部哲学科大学院修士課程終了

1970年「いのちの電話」創立とともに事務局員として勤務。主にボランティアの養成に関わる。

1991～2002年 所属する修道会の本部に勤務するためパリを中心に諸外国を視察。

2003～2010年1月 援助修道会日本管区責任者

現在 聖書研究グループ担当、ボランティア活動の人々のための人間理解の研修グループを担当。

共著：聖文舎「電話相談と危機介入」（1981） 新曜社「眠らぬダイヤル」（1981）

いのちの電話「いのちの共振れ」（1991）

訳書：春秋社「援助する面接：カウンセリング入門」 新世社「シスター」

この要旨は、当日の講演を元に、山梨大学附属図書館医学分館で一部語句等の修正を加えたものです。